

# 格差社会をもたらしたものは何か

グローバリゼーションとの関係下で

土 橋 貴

民衆の武装は一結局賤民の武装である フリードリッヒ・ニーチェ  
『権力への意志』

- 1 グローバリゼーションと格差社会
- 2 日本人における批判的精神の欠如

## 1 グローバリゼーションと格差社会

イマヌエル・ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) によれば、16世紀に生まれたといわれる「世界システム (world system)」は今日をもって形成後500年を終えた。ヨーロッパの中世末期にいわゆる〈領主制の危機〉といわれるものが発生した。その危機とは、ペストの大流行による極端な人口減少と、それにとまなう搾取量の激減により領主層の生活水準が下がったことにより起こった。領主層は搾取率を上げるために別の〈場〉を探したその〈方法〉を考えださなければならなくなった。その場が〈世界大のマーケット〉であり、その方法が世界 (資本主義経済) システムであった。資本主義とは〈一方で安く買ったものを他方で高く売る〉ことで差額を獲得するシステムである。資本主義の原理は〈労働力商品化〉にあり、利潤あるいは搾取とは労働者の労働力を安く買いそれにより作られた商品を労働者に高く買い戻させることから得られる。このような〈資本主義の純粋化〉はマルクスによれば19世紀のイギリスに現われた。

ところで世界システムとしての資本主義は、〈重商主義的資本主義〉の段階から生産財や中間財や消費財を生産する〈産業資本主義〉のそれを經由して現在「IT（情報）産業」がその典型ともいわれる〈ポスト産業資本主義〉の段階に到達した。そのような資本主義の最高の発展段階に到達した21世紀冒頭の今日、「資本の帝国（Empire of Capital）」なるものが出現したとエレン・マークシンズ、ウッドによっていわれている。彼女によれば資本の帝国とは、要は〈グローバル マーケット〉を操作することで世界を支配する巨大権力のことで、それはアメリカのことである<sup>(1)</sup>。

今しがた触れたように16世紀に始まった世界システムの形成とともに、資本主義国家もまた次のような形態変化を見せてきた。それが初期的資本主義に即応する〈絶対王制国家〉から〈ブルジョワ国家〉への形態変化である。ブルジョワ国家もまた次のように形態変化を見せてきた。①前期資本主義国家としての19世紀の「由主義国家」から②後期資本主義国家としての20世紀の「社会国家・福祉国家」を経て③ポスト後期資本主義国家としての21世紀の「ネオリベラリズム国家」への形態変化がそれである。

周知のように19世紀が自由主義的資本主義の時代であったのに対して、20世紀は組織資本主義の時代であったといわれる。ではなぜそのようにいわれるのだろうか。それは、19世紀が7つの海を支配する大英帝国の時代であり、イギリスが世界をマーケット化し自国の製品を販売せんとしていた時代であったことによる。だからイギリスは、たとえば日本の幕藩体制国家を植民地にするよりも、開国させ自国の製品を売るためのマーケットにしようとしたのである。その販路拡張の方法として政治的覇権主義としての自由帝国主義が採用されたということになる。然るに20世紀はそれに対する反動として帝国主義国家と戦い労働者の平等をこの世に実現せんとする社会主義国家が出現する時代であった。しかもそのために社会主義国家は、〈戦時統制経済システム〉をつくった。これに負けなために先進資本主義国家もまた国家によって経済を管理する後期資本主義国家をつくった。しかし1991年に社会主義国家が減び21世紀を迎えた今日、資本主義

国家は、社会国家あるいは福祉国家を維持する意味はなくなったと考え、福祉を実現するためという意味で社会に「介入 (intervention)」することを止め、今度は逆に〈国家からの自由と自律〉を社会に奨励し、それができず逸脱行為をすると見做される者たちを「監視 (surveillance)」する、ポスト後期資本主義国家としての「ネオリベリズム国家」をつくっていく。

ところでウォーラステインによれば世界システムは、16世紀から20世紀までの500年の間、拡大 (expansion)」つまり経済的上昇と「収縮 (contraction)」つまり経済的下降を繰り返してきた。超長期的波動論の視点から見ると1500年から1750年までの経済は収縮期、そして1750年から2000年までのそれは拡大期、そして今後21世紀からは再び収縮期を迎えるといわれる。そのような経済の250年循環という超長期的な循環の中で総じて19世紀は「デフレ (生産>消費)」による不況の時代、20世紀は「インフレ (生産<消費)」による好況の時代そして21世紀は再びデフレつまり不況の時代を迎えるといわれるが、そのなかでコンドラチェフが述べた60年循環理論を適用してみるとどうなるだろうか。それによれば世界は既に1980年代から下降期に入っている。21世紀冒頭の今日は、超長期的な250年サイクル論そしてコンドラチェフの60年の長期波動論双方の面でも経済は収縮つまり下降期に入っているといえよう<sup>(2)</sup>。

そのような時代に入った21世紀冒頭の今日、先に触れた資本の帝国が現われた。資本の帝国といわれるアメリカは激減した蓄積資本を上げるために、周知のように次のようなイデオロギーを掲げた。それが「グローバリゼーション (globalization)」である。それはたんに人と金と物が世界を駆け巡ることをさしている言葉ではない。グローバリゼーションとは資本蓄積を実現する方法を意味し、それは①完全な「民営化 (privatization)」つまり国営企業の廃止と②「規制撤廃 (deregulation)」つまり自由貿易の強制と③「福祉国家 (well fare state)」の停止つまり貧民救済の禁止の3つから構成されるといえる。

では今日世界に喧伝されているグローバリゼーションは、突然無から有が生まれるように21世紀の今日出現したのだろうか。そうではないだろう。そのモデルはあったと思われる。では我々はそのモデルをいったいどこに求めればよいのだろうか。我々はそれを1970年代の共和党政権担当者レーガン (Ronald Reagan) その人の経済政策つまり「レーガノミクス (Reaganomics)」に求めることができよう。レーガノミクスは(1)なぜ主張された(2)その本質とは何だったのだろうか。

まず(1)から説明しよう。レーガンは直接的には民主党政権担当者ジミー・カーターの「リベラリズム (福祉重視主義)」への挑戦者として現われた。リベラリズムの存立基盤は何といっても〈フォーディズム的蓄積体制〉であったろう。それはアメリカ国内の広大なマーケットを当てにした〈大量生産—高賃金—大量消費〉の循環経済システムの成功にかかっていた。そのシステムの特徴は、大量生産した物を労働者に高賃金を与えることで購入させ消費させ、また大量生産していくというシステムにあった。アメリカはこのシステムで形成に成功し大繁栄期を迎えた。しかしこのシステムは1970年代既に破綻していた。抑圧的な〈テラー主義的労務管理〉によりこのシステムを維持し拡大しようとしたが、逆の結果を迎えてしまった。大量生産—高賃金—大量消費の循環経済システムは失敗してしまった。その理由はどこにあったのだろうか。その理由として販売不振に陥り経営不振に見舞われたのにもかかわらず労働者の賃金が高止まりに終わっていたことがあげられるであろう。70年代のアメリカは「スタッグフレーション (stagflation)」に陥ってしまった。そのようなスタッグフレーションとは〈経済停滞 (販売不振) とインフレーション (貨幣価値の下落) の同時存在〉をさしている。通常は商品の販売不振は商品の値段を下げデフレをもたらすはずだが、なぜかインフレを惹起してしまった。スタッグフレーションの原因に①「利潤率の低下」と②「労働生産性の低下」が挙げられる。①を説明すると次のようになる。労働は賃上げを要求しそれに対し資本は賃上げを押さえこもうとする。そこから賃上げ→物価上昇→賃上

げ→物価上昇の悪循環が始まる。つまり悪性のインフレが発生してしまう。次は②を説明しよう。資本は労働者に高賃金を与え労働者の労働インセンティブの上昇を期待したが、逆に賃金上昇→労働インセンティブの低下→賃金上昇→労働インセンティブの低下の悪循環が生まれてしまった。資本は高い生産効率により高品質の商品を作り販売しようと考え労働者に高賃金を支払ったのに、結果は逆になってしまった。資本は、このような労働者のレイオフを考慮せざるをえなかった。そこで資本はスタッグフレーションに歯止めをかける政策形成をレーガン政権に期待した。資本のその期待に応えようとして出てきたのがレーガノミックスであった<sup>(3)</sup>。資本はさらに福祉に金を使わず「財政赤字」と「貿易赤字」という双子の赤字（軍事費を含めればじつは三つ子の赤字）にはどめをかけ、1日も早く黒字に転じるような政策をとるよう国家に迫った。レーガン、ブッシュ（父）と12年間続いた共和党政権は資本の命令に忠実に従う政策をとり続けた。

次に(2)を説明しよう。レーガノミックスは、大量生産—高賃金—大量消費の循環経済システム形成を諦め、労働者の低賃金をととして大量生産し、それを海外に輸出するという〈大量生産—低賃金—大量輸出〉の循環経済システム作りに路線を変更した。ではその原資をどこから調達するというのだろうか。レーガン政権はそのシステムを成功させるために①減税と②労働者の大量解雇そして③福祉の大幅カットを断行したのであった。政権は①の減税により富裕層にお金を戻し彼らに戻ったお金を投資資金として使って貰おうとし②の大量解雇した失業者を低賃金で雇うことにより減少した資本蓄積を上げようとした③により財政赤字を減らそうとした。ではその結果はどうなったか。①については政権の思惑は外れてしまった。減税により戻ったお金を富裕層は投資ではなく一大蕩尽としかいいようが無いような消費に使ってしまったからである。だから貿易赤字を黒字にもっていくつもりで採用した減税策は効果が無かったといえよう。貿易赤字は依然として解消されなかった。その意味でレーガノミックスは失敗したといえよう。だが②と③の政策はどうだったか。それは失敗とは決

していけない。政権は働きもせず高給を取っているとして中産階級を失業させ没落させていったし、減税により財源が無いとして国家に依存せざるをえない人々を裸のまま放り出した。これがホームレス出現の1大原因であったのを我々は忘れてはならない。

先に我々はレーガノミックスはアメリカ国内では①は失敗したが②と③は成功したといった。アメリカは自国で失敗した①の減税策と成功した②と③の政策を、強引に世界全体に拡大しようとしている。ではどのような方法によってか。主としてアジアからの輸出攻勢に敗北してしまったアメリカは、〈大量生産—低賃金—大量輸出〉の循環経済システム形成を止め、次の新しい資本蓄積戦略を生み出すことによってである。それが〈ドル還流システム〉なるものであった。そのシステムを具体的に説明すると次のようになるだろう。アメリカは、たとえば日本から製品をどんどん購入し販売代金としてドルを日本に支払い、日本は販売代金を日本で使わずアメリカ連邦証券や債券を購入する形でアメリカに戻してしまい、アメリカは戻ったドルで再度輸入品を購入したり、WTOやIMFやWorld Bankや自国の「投資銀行 (investment bank)」を介しアジアに投資し儲ける。資本の帝国のアメリカは、自己が牛耳るWTOやIMFやWorld Bankの「SAP (構造調整計画)」（SAPの日本版がアメリカから日本国政府に毎年1月に伝達される「年次計画要望書」であろう）を通して、例えば金持ち優遇策を日本に強制し、裕福な者に戻ったお金をアメリカへの投資資金として引っ張り込むために富裕層に対する減税を要請したり、民営化や規制撤廃や福祉の廃止を強制していく。それがアメリカ発のイデオロギーとしてのグローバリゼーションであろう。

そこで我々が問いたのは、アメリカングローバリストによる、今触れたイデオロギーの強制により現在日本に何がもたらされたかである。「格差社会 (differential society)」といわれる、富裕層と貧困層が極端な形で二極分解的に分かれる不平等社会の発生であろう。これを放置すればやがてはラテンアメリカ型の中間階級が消失した〈砂時計型社会〉が現われるで

あろう。それでよいのだろうか。

既に紀元前4世紀の古代ギリシアのアテネの哲学者アリストテレスは、『政治学』で善き「国制 (politeia)」とは何かを探る中で平等がなぜ大事かを切々と訴えているが、彼の政治哲学は格差社会を批判する上で参考となると思われるので見ていこう。

アリストテレスは『政治学』で(1)政体を見る方法と(2)政体の分類と(3)政体を支える基盤の3つに分けながら「国制」を見ている。まず(1)から見ていこう。アリストテレスの先輩にあたるプラトンは、存在を「形相」つまりイデアと「質料」つまり個々の存在物に分け、存在物に〈秩序〉を与えるのは形相であるといった。しかも彼は形相としてのイデアは、質料の外またその上に超越的に存在すると考えた。このように個々の存在物から超越的にイデアが存在するとするプラトンの主張は、特に後の古代のキリスト教神学者のプロティノス等に継承されたのは明らかである。ところがプラトンとは異なり、アリストテレスは、形相としての「エイドス」は質料の中からまたそれを通して具現していくとらえた。国制に働く力としての〈エネルゲイア〉はその内部に存在するとされる。次に(2)の政体の分類に移る。彼は伝来の政体の分類を素材に、それに批判的検討を加える。その際彼は「公共の利益を目標」とする「正しい国制」と「間違っただけあるいは逸脱した国制」を、政体を検討する際の基準に据える。前者は唯一者支配としての「王制 (basileia)」と少数者支配としての「貴族制 (aristocratia)」そして多数者支配としての「国制 (politeia)」であり、前者の墮落形態としての後者は「僭主制 (tyrannis)」次に「寡頭制 (origarchia)」そして「民主制 (democratia)」である。善き国制は天に在るのではなくこの地上に在ると彼は考えたといえようが、彼はどんな形態を探ろうとも、国家つまりポリスの目的を〈善く生きること〉に置いた。彼の理想の国家は politeia であった。最後に(3)である。民主制の根本原理は〈多数者支配〉にありそれを徹底すると皮肉にも民主制を滅ぼしてしまう。民主制は〈衆愚政治〉に墮落してしまいがちである。「中間的な人々」が国

民の多数を占める時、それは最も安定する。幸福な生活とは〈徳〉に従い営まれる生活であり、そして徳の本質は、アリストテレスの場合 [中間] を指していた。彼によれば富裕層は〈傲慢〉であり貧民層は〈卑屈で無頼〉であり、中間層のみが [理性] に従うことができる<sup>(4)</sup>。我々現代人はアリストテレスがいったポリテイアを支えるエートスを学ぶべきであろう。

アメリカングローバリゼーションによりつくられた格差社会により、日本では急速に中間層が消えつつある。日本の国家を支えるのは中間層の中間意識であったはずである。アリストテレスが言ったように、中間層がなくなれば1つの国に富裕層と貧困層の2つの国が出現してしまう。そうなれば双方の間で戦いが起きてしまうだろう。その典型的な例は現在の南アフリカに見られるであろう。18世紀のルソーもまた『社会契約論』で理想の政体は民主制であるとし、そのエートスを徳（ルソーはすべての政体に徳を求めているが）に求め、そのような体制を可能とする現実基盤は「中間階級支配 (médiocratie) にあると知っているように、体制の安定にとり中産階級の存在は欠かせないのである。中産階級支配への信頼は、古代のプラトンやアリストテレスから現代まで連綿と続くのを我々は忘れてはならない<sup>(5)</sup>。

## 2 日本人における批判的精神の欠如

2007年の現在の日本において格差は異常な程拡大した深く浸透した。レーガニズムは日本の政治体制安定の要となる中産階級にターゲットを絞り、彼らをアンダークラスに突き落としていっている。層の厚い中産階級がアパークラスとロアークラスを牽制し双方を自己の側に引っ張り込むことで成り立つ〈ダイヤ型社会〉は崩れ、中産階級は没落し急ピッチでラテンアメリカ型の〈砂時計型〉に移行していく。日本はアメリカングローバリストにより強制されるグローバリゼーションによりアメリカの格差社会

形成を追走している真っ最中といってよい。

蓄積の激減に見舞われる日本の資本は、アメリカングローバリストと連携し、政権与党を利用し中産階級の存在を否定する政策を断行しているが、どんなにアメリカと日本が日本を民営化し規制撤廃し福祉を削減しグローバルマーケットをつくっていったとしても、購買意欲と消費意欲の最も高い中産階級を没落させてしまったならば、元も子もなくなってしまうのではなかろうか。グローバル経済どころでないはずだが、この見方は浅薄なのかも知れない。というのも資本の帝国アメリカは、日本の富をとことん収奪できればそれでよいと思っているのだから。

ところでグローバリゼーションにより下に突き落とされていく日本の人々はなぜそれに声を上げ非難しないのだろうか。なぜ権力に唯々諾々と従ってしまうのだろうか。その理由はいろいろ考えられるだろうが、1つの大きな理由として〈批判的精神〉の欠如が挙げられるのではなかろうか。日本人の度し難い批判的精神の無さがかつて決りだした哲学者がいたのを我々は忘れてはいないだろうか。それはナチスドイツに追われ1937年の秋から1941年の春までの約5年の間日本に滞在し、東北大学で哲学の教官を務め、42年にアメリカに亡命し戦後ドイツに帰国したユダヤ系ドイツ人哲学者のカール・レーヴィット (Karl Lowith) その人である。レーヴィットは、40年に『思想』の9、10、11月号に論文「ヨーロッパのニヒリズム」を発表したが、11月号の最後に「日本の読者に与える跋」(以下「跋」と略記する)なるものを付け加えた。「跋」は、42年(昭和17年)の『文学界』(文芸春秋社)に現われることになる、かの悪名高い「近代の超克」論を前もって批判するかのような要旨を含んでいた<sup>(6)</sup>。そもそも近代の超克をテーマにした座談会に主席した全員が近代とは何かを明確に規定した上で討論しているとは思われないので、近代の超克論の骨子を見極めるのは難しいが、それでも座談会に臨んだ参加者全員の基本的スタンスを凡そ次のようにまとめてよいのではなかろうか。〈帝国主義—帝国主義からの解放〉と〈物質的文明—精神的文明〉の2項対立のパラダイムに。近代の超

克論者は、対アジア戦争は侵略戦争であるのでそれを誇ることはできず鬱々としていたが、42年の日米開戦は帝国主義からのアジアの解放そしてヨーロッパの物質的文明からのアジアの精神文明の解放であるとして、「カラッとした気持ち」（河上徹三郎）になり、むしろ精神的の高揚さえ感じた。結果的には、近代の超克論者は、超国家主義的な天皇制国家のお先棒を担ぐ「道化者 (fool)」に終わった。竹内好も言うように「理性の立場からすれば、帝国主義によって帝国主義を倒すことができないのは自明である<sup>(7)</sup>」。つまり帝国主義により帝国主義に反抗することは、それ自体矛盾を孕んでいるのだから、到底アジアの人々を納得させることことはできなかったのである。その意味で近代の超克論者は精神分裂症的存在であったといえよう。

そこで我々は、当時日本人により盛んに批判されていたヨーロッパの近代文明を、レーヴィットがどのように弁明し、それがもつ日本に対する優越性をどのように述べているかを「跋」を読みながら要約することにしよう。彼もまた日本の近代の超克論者のように、ヨーロッパの近代は終末に到達したと考えている。古典古代から近代の晩期のヘーゲルまでの哲学は〈理念と現実の融和〉の下に構成された。〈理念は現実の中で安らぎを覚える〉ことができたのであった。だが彼によればニーチェやキエルケゴール以降、現実には理念が安らぎを得ることができなくなってしまった。彼ら以降の哲学者はハイマートロスの憂き目を味わうことになる。現実には〈秩序に満ちた世界〉ではないとされた。逆に現実には〈混沌〉であるとされることから「ニヒリズム」が出現する。そのニヒリズムを超克するために極めて主観性あるいは恣意性の強いものとして〈権力への意志〉なるものが出てくる。それにより混沌に秩序を与えるという考えが生まれる。そこからレオ・シュトラウス (leo strauss) によりいわれたように、彼らの哲学は「過激な歴史主義 (radical historicism)」という名の「実存主義」の相貌を帯びることになる。レーヴィットは彼の『跋』で日本人の読者に語りかける。にもかかわらず日本よりも優れたものがヨーロッパには

あるのだと。では彼がいう日本に対して誇りうる「ヨーロッパの最上のも  
の」とはいったい何か。それは「自己批判」の能力である。彼は「跋」  
で、「ヨーロッパ的自己批判の解明」と「日本の自愛の批判」を同時に行  
わなければならないという。日本はヨーロッパからヨーロッパにとり最も  
大事なものとしての自己批判的精神を学び受容しなかった。

では日本はヨーロッパ文明から〈何を〉〈どのように〉受け取ったのか。  
日本はヨーロッパから「戦争に役立つ」手段と位置づけられる「物質的文  
明」(特に産業と技術)のみを受容したのである。だから日本は幕末から  
1945年の敗戦まで「イデオロギー的鎖国、技術的開国<sup>(8)</sup>」(丸山真男)を貫  
き通し、07年の今日またそれが復活しつつあるというのが現状である。で  
は日本人はヨーロッパ文明をどのように受容したのだろうか。古代ギリシ  
ア文明を受け継いだヨーロッパ文明の特質は、自己批判の精神にある。レ  
ーヴィットによれば、ギリシア人のみが「パノラマ式」の眼」つまり  
「世界と自己自身を観る客観的な即物的な眼差、比較し区別することがで  
き、自己を他に於いて認識する眼差しを有していた<sup>(9)</sup>」。ギリシア文明の  
継承者たるヨーロッパ人もまた、ヘーゲルの言え、自己を他において  
認識するために世界に入っていく。そうすることでヨーロッパ人は「他在  
に於いて自己を失わずにいる」。ヘーゲルによれば、精神は追う者から逃  
げるとき、あるいは追う者を単に否定してしまったときは、決して自由で  
はありえず、逆に追う者を追い、追う者のなかに入り食い破って自己に戻  
ってくるとき、自由になりうる。ヘーゲルはそれを植物を例に取り次のよ  
うに説明している。植物が芽から花に〈変化〉しながらやがて花から芽に  
〈還帰〉するように、精神もまた他者に変化しながら自己に還帰してくる。  
その意味で〈変化と還帰の弁証法的統一〉としての「絶対知」が精神の自  
由の極地なのである。だからギリシア精神の継承者たるヨーロッパ人の精  
神は、やがて自己に還帰するのだから、他在化することを怖れない。だが  
日本人は、他者のなかに入り他者のなか自己を置きかつそのなかで自己  
の存在を客観的に観ながら、やがて自己に帰るという意味での自己の自由

を実現するという精神をもつことができない。イデオロギ一的鎖国を続ける日本人は、ヨーロッパ文明を、自らのそれとは全く異なるものと見做し、外から眺め取り入れるが、決してヨーロッパ文明のなかに入り込み学び、それを自己のものとした上で、自己に帰ってはこない。日本人は、やがて自己に帰るために他者に変化していく勇気を持ち合わせていない。レーヴィットによれば、そのような日本人が「他在に於いて自己を失わずにいる」ことなどができるはずがないといえよう<sup>(10)</sup>。

ではなぜ日本人はそのような状態に陥っているのだろうか。そこが問題である。その時先に触れた「日本の自愛」なるものが問題となる。およそヨーロッパ人が「現存するもの、国家及び自然、神及び人間、教義及び偏見<sup>(11)</sup>」に対し呵責ない批判を加える傾向があるのに対して、日本人はそれを避けてしまう傾向がある。レーヴィットによれば、それは日本人がヨーロッパ人のように、神を前にして「厭うべき我」(パスカル)という自己意識をもち、そこから批判的精神を発揮するよりも、むしろ自己を囲む環境をそのまま受け入れてしまう自己を強く愛してしまうことによる。なぜこのようなことが起きてしまうのだろうか。レーヴィットはこの問題には触れていないので、ここからは我々が解釈するしかない。我々日本人の人間関係において、〈水平的に〉ではなく〈垂直的に〉人々を縛る「世間」がまだまだ幅を利かせているから、そのような精神構造が生まれると思われる。近代化によって克服されなかったもの、それが世間という名の縦の「人間関係」であろう。

では日本の人間関係のなかで〈私—あなた〉は、どのような関係ととらえられているのだろうか。私とあなたは2項対立的には存在しない。私とは〈あなたの私〉であり、あなたとは〈私のあなた〉であり、自己とは結局他者という1項に吸収されてしまう存在でしかない。他者と異なる存在としての自己はない。極端にいえば〈あなたとあなた〉しか存在しないということになる。このような自己なる者を、かつて西田幾太郎は「述語的主語」と言った。〈私(主語)はx会社の社員である(述語)〉。私と

いう主語を規定するのは〈x 会社〉という述語である。私とは所詮他者でしかないことになろう。かつてフランスの精神分析学者のジャック・ラカン (Jacques Lacan) は「鏡像段階」という言葉を用いたがそれはいったい何か。例えばサルは鏡に映った自分を見て最初驚くが、鏡に写った自分の姿にすぐ興味を失ってしまう。サルは鏡に映った自分と自分とが異なるのを永遠に認識できない。これは、人間でいえば「主体我」(鏡を見る自分)と「客体我」(鏡に映った自分)が分裂する以前の段階つまり「赤子」の段階に相当するであろう。「客体的自己」(Me)つまり役割的の自己から「主体的自己」(I)つまり脱役割的の自己に脱皮できない人間は赤子に等しい。2つの自己に分裂しその分裂のなかでもがき苦しむ人間の段階をラカンは、鏡像段階といったが、そのような人間にのみ、精神分析学は治療方法として有効なのだ。というのも赤子に今述べたような精神的苦しみは存在しないからである。日本人は鏡像段階以前のつまり赤子の段階にいまだいるといえよう。そのような日本人は精神分析の対象とはなりえない。他者の厳しい「眼差し (regard)」のなかでひたすら恐れ入り、他者の寵愛に包まれた自分を愛するという、いわば「奴隷根性 (servant spirit)」を持った私に、自分と他者を批判的に観る姿勢など望むのは土台無理な話といえよう。そのような人間は〈主体的自己〉を強め〈役割的の自己〉を批判する前に、自己破壊に、あるいはネガティブな形の〈主体的自己〉つまり他者の抹殺に向かって突き進んでしまいがちである。我々は、役割的の自己を批判し、さらにそのような役割的の自己を強制する他者とはいったい何者なのを分析すべきであろう<sup>(12)</sup>。そのためには我々はレーヴィットの「跋」を1度じっくり読む必要があるのではなかろうか。

#### 注

- (1) エレン・メイクシンズ、ウッドの「帝国」概念の説明については以下の拙稿を参照。『中央学院大学論叢』、「国民国家と市民社会と公共性の変容」、2006年、6月号、アントニオ・ネグリ／マイケル・ハートの『帝国』についても以下の拙稿を参照。『法学論叢』、「カール・シュミットの人種差別について」、2005年、(法学部創設20周年記念号)。

- (2) 世界システムの詳しい説明に関しては拙書『国家、権力、イデオロギー』の『世界システム』を参照せよ。
- (3) スタグフレーションに関しても先の拙書の「世界システム」の「第3部 世界システムの中心部」を参照せよ。
- (4) アリストテレス（山本光雄説）、『政治学』、13巻、7章等を見よ。
- (5) ルソーは『社会契約論』で立法権と執行権を分けている。前者は市民全体が所有し後者は前者の委任によりその権力行使を委ねられる。徳は後者が持つべきものとされるという点で、アリストテレスの国制における徳とは異なる。
- (6) カール・レーヴィット、「日本人の読者に与える跋」、『思想』、1940年、11月号。
- (7) 竹内好、『竹内好コレクション I 日本への／からのまなざし』、日本経済新聞社、109頁。
- (8) 丸山真男、『日本のかくれた形』「III、原型、古層、執拗低音」、岩波書店、99頁。
- (9) カール・レーヴィット、同書、34頁。
- (10) 例えば17、18世紀の政治哲学は哲学のなかに歴史的なるものを入れていったが、19世紀のヘーゲルの哲学は歴史のなかに哲学を入れていった。だからヘーゲル哲学は『歴史哲学』となったといえよう。ヘーゲル以降哲学と歴史学は分離していく。極端なことをいうと19世紀から現代まで哲学の「居心地」は悪くなる一方である。
- (11) カール・レーヴィット、同書、36頁。
- (12) 日本の人間関係の特質は依然として縦型つまり〈支配—服従関係〉にあるのではなからうか。その点について分析したものについては次の拙書を参照。中央学院大学創立40周年『春夏秋冬』、『全体主義を生み支える精神構造』。特に2、「政治支配の在り方における全体主義」を参照。